

千鳥足ふう「授業の周辺」あれこれ

酔っぱらいWojisan

それって、いつまで

2月の終わりに「示範授業」を見た。(日程説明のプリントに「示範授業」と書かれていた) 6年生の3学期である。

この学級では誰かが発言をするとみんなが拍手をするようになってきているらしい。初めの頃は拍手はなかったが、しばらくするといつも通りにか拍手が出始めた。

授業者は言った。「拍手があると勇気づけられますね」

それからずっと誰かが発言する度に拍手があった。発言、拍手、発言、拍手…である。

私には子どもの発言の間の悪さが気になった。拍手が終わるまでは次の子が言えないのだ。(その子たちにとっては、それが日常のリズムになっているのだろうけど)

この学級では、侃々諤々と子どもたちの意見が飛び交う授業は難しいだろうと感じた。

「うん、うん」「へーえ」と相づちをうちながら、体の向きを変えて友達の発言を聞く授業を見ることがある。一言も逃さず聞き取ろうとしているように見える。

だが相づちをうたなくても、体の向きを変えなくても聞けるものなのだ。

形式的な「うん、うん、へーえ」をやり続けていると、本当に心が動いたときの驚きの声か埋もれてしまう。

一年間の授業の中では教室にだけ見られる不自然な形を取り入れる時期もあろう。形式を強いるときもあろう。しかし、いつまでそれを続けるのか。どうなればそれをやめて次の段階に進むのか、という見通しを持つことが必要だ。

その基準があるからこそ、目の前の子どもの現状を把握し、評価できるのだ。

教育という営みは、それを必要としない人間に育てていくものなのだから。

その言い方って

「〇〇ちゃんの言いたいことってどんなこと(か、言える人)」と言う教師がいる。ほかの子どもが当人に「〇〇ちゃん、～みたいなことを言ったでな」と確かめるのとは違う。

この教師の言葉は「〇〇ちゃんはきちんと言えていない」ということを学級の子に伝えている。

友達に言い直されて〇〇ちゃんは言えるようになるのか。ならない。ならば、何のために「言いたいことってどんなこと」を聞くのか。教師のためである。

〇〇ちゃんの言いたいことは、一人一人がそれぞれ勝手にわかり合えばいい。それこそ、「自分なり」にわかればいい。

「〇〇ちゃんにつけ足して…」という言い方がある。あまりにも当たり前に使っている。だから毎日の授業で子どもは無意識に使っているだろう。枕詞と言ってもいい。

でも、少し考えてみると、「つけ足して」という言葉は、〇〇ちゃんの言ったことは何か欠けている、完璧ではないということを言外に言っている。

それを言われた〇〇ちゃんはどう思うだろう。

自分が職員会議で喋った後、他の教師に「つけ足して」もらったときはどう感じるか。少し思い巡らせればわかる。

枕詞はなくてもよいと思うが、せめて「続けて」「続いて」「似ていて」などの言葉の方が私にはおごりがなく聞こえる、と思ってしまうのは穿ち過ぎだろうか。

授業観が変わるとき

子どもの発言を聞いて授業をしている私の頭の中のように、すべての子どもの頭の中は、互いの発言を「つけ足して」考えを構築しているのだろうか。何人の子が45分の中の発言をつなげ、自分の考えを広げ、深めることができているのだろうか。子どもの一連の発言を聞いて、一番学習したのは私だったというのでは笑えない。

と、思いいたってから私の授業は(指名なし)討論中心の授業にシフトしていった。

討論の授業については紙幅の関係で丁寧に書けないが、子どもたちに所謂「フラット感」とでもいうべきものを抱かせることが必要だと分かった。

「あの子の言うことは正解が多い」というような状態では討論の授業はできない。話し合いにもならない。全員が「自分の考えもそこそこののだ」という気持ちを持って初めて討論になる。これには時間がかかる。

やがて、「より全員に」「より全員が」という気持ちが強くなってきた私は『学び合い』の考え方を取り入れた授業を始める。初めて取り入れたのは2012年。考え方を知ったのはそれより4、5年前。それまで知っていた授業の考え方とはあまりにも違ったからすぐには取り入れられなかったのだ。その間、高知や東京等で開かれた研究会に参加して分かったとしていた。

取り入れてみて驚いた。

「もう一回、言って」「なんでこれで割るん?」「そこまでは分かるけど、そこからが…」等の子どもの言葉があちらこちらから聞こえてくる。本気になって必死になって分かってしようとしているのだ。本当に分かりたくなかった子は、こういう言い方をするのだと私が知ったときだった。同時に、今までの私の従来型の授業は一体何だったのだ、と思わされた。

いよいよ「アクティブ・ラーニング」の時代が来る。今までの授業の考え方とはどう違うのだろうか。もし私が現役だとしたら授業観をどう変えていかななくてはならないのだろうか。

ひとつは「射程距離」だ。

約30年前に立ち上がった教育運動から私が頑張ってきた考え方は「1時間の授業づくり」だった。1時間の授業をどう作るかを考え、構成し、実践する。そのための教材研究をし、ネタを開発し、発問・指示を考えた。

「アクティブ・ラーニング」の考え方は、1時間では終わらない。終わってはいけない。

この1時間で、この子の将来の何かにつながるような「学び」があったのか、という視座が必要になってくる。そうそう毎時間は言えないだろうが、その意識を教師が持つ必要がある。例えば、「いつもは独りで学習を進める〇〇さんは、今日の授業では、休憩時間には殆ど遊んだことのない□□さんの所へノートを持って行って話し合っていた。このことは〇〇さんの今後の人との関わりにとって…」というような見方がいるだろう。「発表の苦手なあの子が、今日の授業で発表できた」で、とどまっていたはいけない。

「射程距離」の長さを「この子は自己中心的だから『バスの運転士さんは運賃を分けるか』という課題設定をしました」「この学級は覇気に欠けるから『じゃがいもの芽を全部出す方法を考える』という課題設定をしました」と築地久子氏の授業の課題に関連づけてしまう。(こんなふうに分っているところに安易に結びつけて安心してしまうところが、私がもはや旧人類という証なのだ。新しい「観」が必要なのに)

ところで「アクティブ・ラーニング」とは言わずに「主体的・対話的で深い学び」と言うらしい。

それはなぜかは諸説あるが、例えば「ペア(グループ)になって話し合っごらん。〇分間」と言われて話し合い、教師が設定した時間が来れば机を元に戻して授業が続く。

これで「アクティブ・ラーニング」をやってますと言いかねない状況が危惧されるからか。「主体的・対話的で深い学び」という言葉を使えば、上のような授業は「アクティブ・ラーニング」たりえないということがわかる。

ペア(グループ)で時間を過ごす前と後では何が変わっているのか。その意識を教師は持たなければならない。ペア活動後も相変わらず元気な発言力のある子が、ペア前と同じように活躍する授業では意味がない。そう考えれば、〇分間と教師が言うのも、教師の都合にしかすぎないことだ。

「何をさせるか」ではなく、「何を達成させるか」という視点が必要なのだ。

授業観が変わらなければならないとき。ワクワクする。でも、ついていけるはずがないから逃げ切れてよかった、と同時に思う。ちなみに、私は教員免許更新の第一期。逃げ切れなかった。一コ上だったら…、と当時何回思ったことか。

そして今、熾火が消えるがごとく教育用語が目に入らなくなってきている。それでいいのだと思っている。若い人たちに託さなくっちゃ。

『アクティブ・ラーニングの評価がわかる!』西川 純(学陽書房)

『資質・能力を最大限に引き出す!『学び合い』の手引き ルーツ&考え方編』

西川純(明治図書)

『まんがで知る教師の学び2 アクティブ・ラーニングとは何か』

前田康裕(さくら書房)は必読書です。

【2017. 4. 22 稿】